第一編　郡山町の概要

第一章　位置と面積

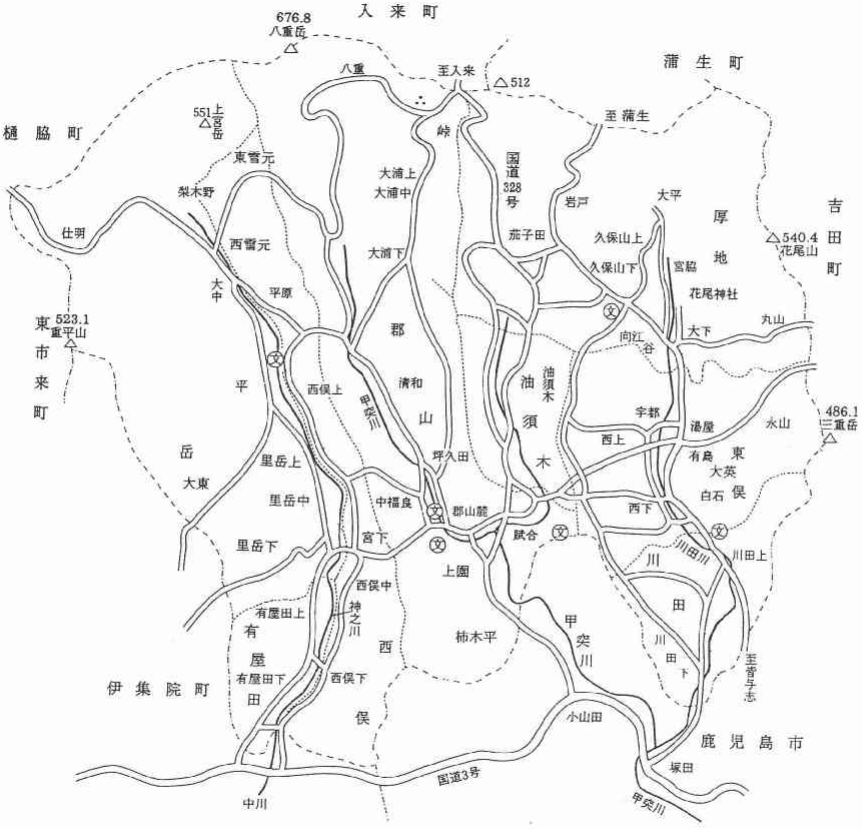
第一節　郡山町の位置

1　地理的位置

郡山町は、薩摩半島のほぼ中央、日置郡の北東部に位置し、東は鹿児島郡吉田町、南東は鹿児島市、南西は日置郡伊集院町、西は同じく東市来町、北西は薩摩郡樋脇町、北は西側から同じく姶良郡の蒲生町・薩摩郡の入来町に隣接する内陸の町である。

郡山町は、県都鹿児島市の後背森林地帯として、町内最高峰の八重山（六七六・八メートル）を源とする甲突川を有し、水源涵養や環境保全の役割を担う水と緑の豊かな土地である。その他にも町北部の標高五〇〇メートル以上の山々から、いくつかの河川が南流している。町域は最長で東西に約九・二五キロメートル、南北に約九キロメートルの距離を有する。なお、地形・地質については第二編に詳しく述べる。

東（永　山）東経一三〇度三一分
西（仕　明）東経一三〇度二五分
南（西　俣）北緯三一度三九分
北（上ノ丸）北緯三一度四四分



郡山町略図

2　社会的位置

郡山町は、かつての郡山村全村と下伊集院村の一部で構成されている。明治二二年（一八八九）の町村制で両村が生まれたが、郡山村は藩政時代の郡山郷がその原型となっており、川田・東俣・厚地・郡山・油須木・西俣の六つの村（後、大字）から成立している。一方、下伊集院村にあった岳（嶽）・有屋田の大字は、藩政時代は伊集院郷に属する二村だった。この八大字が昭和三一年（一九五六）の町制発足の際に郡山町となった。

郡山町は、通勤・通学や商業圏、高度医療など、社会生活の多くを鹿児島市との結びつきに委ねてきた。また、南西に隣接する伊集院町にも教育施設やショッピングセンター、県の合庁など出先機関があるため、一日を通じて人の流れがある。たとえば、町制以前の有屋田地区は、伊集院町麦生田にある共進小学校の通学圏だった。また、町内には大規模な雇用を抱える企業が少ないことも、町外への通勤者が多い理由の一つである。

交通の面では、町内には鉄道路線や高速道路はなく、国道や県道、町道など一般道のみだが、国道三号が町の南境を東西にかすめ、その小山田交差点を起点とする国道三二八号が町の中央部を南北に貫き、藩政時代には「郡山筋」と呼ばれた北薩への導入路となっている。また、主要地方道として、小山田・川田・蒲生線が国道三号の塚田から町の東部を北上し、伊集院・蒲生・溝辺線が西俣から市街部を通り東俣へと東西に貫き、川内・郡山線が市街部から東市来・樋脇へと続いている。このように町の市街部を通過する主要道は、近年拡幅工事が進んだこともあって、車両の通行量は多く、バス・トラックなどの大型車両も頻繁に行き交っている。現在の郡山町は、町外の人や物が多量に交差する立地にあるといえるだろう。

第二節　面積

1　総面積

昭和三一年（一九五六）一〇月の郡山村と有屋田・岳地区の合併による郡山町誕生の際の総面積は五七八八㌶とされ（昭和四〇年「町勢要覧」）、その後若干の変動はあるが、平成元年（一九九三）の地籍調査終了後は五七七五㌶と定まり、現在に至っている。

2　面積の構成

面積の種別ごとに目立った変化を昭和三六年と平成一六年の数値で比べると（表1―1）、畑地と山林・原野の減少に、宅地と「その他」の増加が挙げられる。

表1―1　郡山町の面積構成表　（単位ha）

利用別	総面積	田	畑	一般山林	宅地	原野	雑種地	その他
昭和36 (1961)	5,873 (100%)	569.0 (9.7%)	713.0 (12.1%)	3735.0 (63.6%)	82.0 (1.4%)	552.0 (9.3%)	27.2 (0.5%)	194.8 (3.3%)
平成16 (2004)	5,775 (100%)	498.6 (8.6)	278.7 (4.8)	3,080.3 (53.3)	238.7 (4.1)	135.4 (2.3)	87.4 (1.5)	1,455.9 (25.2)

（上段：昭和36年町勢要覧　下段：固定資産概要調査　平成16年1月1日現在）

約四〇年の間に農林業の収縮や、鹿児島市のベッドタウンとして、住宅地の造成などが行われた結果であろう。しかし、現在でも総面積に占める林野率は、七二・四％と郡内一位である（『日置地域農林業の動向』）。

「その他」の項目には、公園なども含まれており、その数字には、八重山公園や東俣の郡山町総合体育施設などの大規模な造成も反映している。

【参考・引用文献】

「町勢要覧」昭和三六・四〇年…町役場資料
『日置地域農林業の動向』平成一五年度版：日置地域農政企画推進会議・日置地区林業振興協議会・伊集院農林事務所編　平成一六年発行

第二章　気　象

第一節　気　温

郡山町内で気象庁が管轄する観測は、入来峠の降水量だけなので、ここでは便宜上隣接する鹿児島市のデータも利用するが、内陸の丘陵地にあるため、鹿児島市よりも気温は幾分低めで雨も多く、特に冬場の冷え込みは山間部に行くほど厳しく、年に数日は雪が降る。

表2―1は昭和四六年（一九七一）から五年ごとの鹿児島市と郡山町の平均気温・最高気温・最低気温・年降水量を挙げたものである（平成五年は参照）。町役場の経済課、あるいは農林事務所でも気温と降水量を観測しているが、その数値からも前述の通り、平均気温は鹿児島市より二度近く低く、降水量は約五〇〇ミリ多い様子が明らかとなっている。

全体を通して目を引くのは、十数年前から、鹿児島市の平均気温が一八度以上を記録する年が多くなり、さらに近年は一九度近くま

表２－１　鹿児島市と郡山町の気象

年＼項目		平均気温	最高気温	最低気温	年降水量
昭和 46（1971）	鹿市	17．3℃	35．0℃	−3．7℃	2438.5 ㎜
	郡山	**15．2℃**	−	−	**2965.0 ㎜**
昭和 51（1976）	鹿市	17．2℃	33．8℃	−4．4℃	2599.0 ㎜
	郡山	**15．9℃**	−	−	**2984.0 ㎜**
昭和 56（1981）	鹿市	17．4℃	35．6℃	−4．6℃	1818.0 ㎜
昭和 61（1986）	鹿市	17．5℃	34．7℃	−2．0℃	1887.0 ㎜
平成 3（1991）	鹿市	18．4℃	35．1℃	−2．1℃	2162.5 ㎜
	郡山	**16．6℃**	**33．9℃**	**−4．0℃**	**2614.5 ㎜**
平成 5（1993）	鹿市	17．7℃	33．1℃	−0．7℃	4022.0 ㎜
	郡山	**15．4℃**	**32．8℃**	**−4．3℃**	**4581.0 ㎜**
平成 8（1996）	鹿市	18．3℃	34．8℃	−2．4℃	2082.5 ㎜
	郡山	−	−	−	**1757.0 ㎜**
平成 13（2001）	鹿市	18．9℃	36．5℃	−1．0℃	1990.0 ㎜
平成 16（2004）	鹿市	19．2℃	36．1℃	−1．5℃	2314.5 ㎜

※　気象庁ホームページより
※　昭和46・51・平成3・5・8年の下段の数値は、郡山町経済課の計測による（「町勢要覧1978」・農林事務所資料）。

で上昇している点であろう。これは、鹿児島市の都市化が進み、ヒートアイランド現象が発生しているためである。郡山町では森林を抱え、また、温暖化の原因となる二酸化炭素の排出量が鹿児島市に比べて少ないものの、世界規模で進む環境変化に応じて、平均気温はここ数年で確実に上昇していると思われる。

第二節　降水量

降水量について、近年特記すべき点は、平成五年（一九九三）の数値四五八一ミリ（郡山町の計測数値）であろう。この年は、六月の梅雨から例年にない長雨となり、夏場の特に八月一、六日の両日に降り続いた雨と、九月三日の台風一三号がもたらした暴風雨により、年間の降水量が未曾有の数値となった。この降雨による災害は、一般に大水害のあった日付をとって「八・六水害」と呼ばれているが、郡山はこの年だけでなく、戦後だけでも降雨による大災害に幾度となく見舞われている（水害については、第二編に詳述する）。

表２－２　入来峠の月別降水量（mm）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
平成5 1993	70.0	45.0	142.0	110.0	103.0	578.0	599.0	894.0	383.0	16.0	64.0	49.0
平成16 2004	—	—	93.0]	117.0	310.0	153.0	122.0	411.0	247.0)	338.0	101.0	74.0)

※　表中の ］は資料不足値、 ）は準完全値を表す。　　気象庁ホームページより

なお、郡山町には鹿児島市の水瓶ともいうべき甲突川の源があるので、降水量を測定するため、気象庁の雨量計が昭和四〇年（一九六五）七月一日から入来峠に設置されている。表２―２は、同年と平成一六年の月別降水量の一覧である。六月から八月までの降水量を両年で比較すると、平成五年の異常気象がはっきりと見て取れる。

同じく町内には、県の河川情報システムの構築に伴い、甲突川の水位を測量するため、常盤の宮山橋側に水位計が設置され、その水位の変化は、随時電話での問い合わせに自動音声が応じるシステムとして、災害情報の一助となっている。

宮山橋の水位観測所（甲突）

第三章　人　口

第一節　郡山郷から郡山町までの人口

まず、第一章第一節の２で述べたように、郡山町発足までは、岳・有屋田が下伊集院村の一地区であるため、郡山町域での統計には、合併の前後でその二地域の有無を考慮しなくてはならない。

表３―１は、藩政時代から現代までの郡山郷・村・町の総人口の一覧だが、藩政時代初期から三〇〇年を経て四倍近く増えたこと、第二次世界大戦後の一時的な増加と高度経済成長期の減少とが見て取れる。藩政期の人口の動向には、藩の政策における人為的な側面が見られるが、それについては第七編第四章で詳しく述べる。下って高度経済成長期に当たる昭和三五年（一九六〇）からわずか十数年では、約二五〇〇人もの急激な落ち込みを見せるが、郡山町においても全国的な過疎化の波を受けた跡が示され、多くの就業人口が主に県外の大都市部へ流出した時期である。また、昭和五〇年代以降の漸増については、第八編第六章・第七章で詳しく解説するが、主に県都鹿児島市と隣接する立地が影響していると思われる。

なお、世帯数の動きについて過去四〇年間を見ると、人口の増減に関わらず、世帯数だけは大幅に増えてきており、郡山でも核家族化が進み、一世帯当たりの構成人員が減少しているのがわかる。

図３―１は、年齢階層別に昭和五〇年（一九七五）と平成一二年（二〇〇〇）を並記したものだが、両年を比較してみると、一〇～一九歳代の減少と六〇～八〇歳代の増加という二点、つまり、現代の我が国の人口問題、少子化と高齢化が明らかに見て取れる。ちなみに、昭和五〇年の三〇歳代の落ち込みは、高度経済成長期に大都市部へ就職していった「金の卵」の世代に重なるためであろう。

表３－１　郡山の人口・世帯数推移

年次	区分	男	女	総数	世帯数	一世帯当人員
寛永 13	1636	1,027	750	1,777	―	―
明治 4	1871	2,314	2,221	4,535	―	―
明治 17	1884	2,730	2,837	5,567	―	―
明治 32	1899	2,647	2,881	5,528	1,104	5.00
大正 9	1920	3,256	3,597	6,853	1,423	4.81
14	1925	3,337	3,607	6,944	1,462	4.75
昭和 5	1930	3,511	3,784	7,295	1,463	4.98
10	1935	3,568	3,867	7,435	1,505	4.91
15	1940	3,462	3,742	7,204	1,528	4.71
22	1947	4,640	5,110	9,750	1,896	5.14
25	1950	4,619	5,032	9,651	1,903	5.07
30	1955	4,511	4,792	9,303	1,887	4.95
31	1956	―	―	10,936	―	―
35	1960	4,827	5,184	10,011	2,164	4.62
40	1965	4,328	4,774	9,102	2,133	4.67
45	1970	3,852	4,222	8,074	2,138	3.78
50	1975	3,585	3,924	7,509	2,144	3.50
55	1980	3,812	4,098	7,910	2,350	3.36
60	1985	3,883	4,248	8,131	2,497	3.25
平成 2	1990	3,860	4,250	8,110	2,636	3.07
7	1995	3,894	4,357	8,251	2,948	2.79
12	2000	3,968	4,346	8,314	3,061	2.71
16	2004	**4,073**	**4,435**	**8,510**	**3,394**	**2.50**

（大正９～平成１２は国勢調査）

※　「鹿児島県地誌」の各村人口を加算した明治 17 年を除き、昭和 30 年までは郡山郷・郡山村（有屋田・嶽を含まない）の人口のみ。

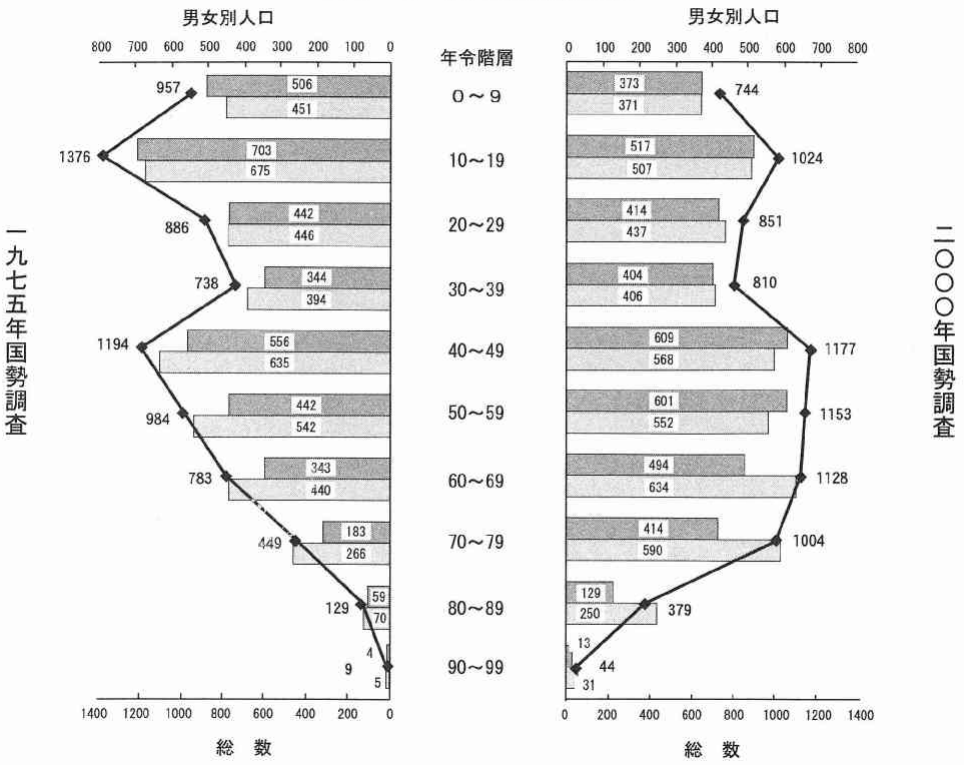
※　寛永 13 年・明治 4 年は尾口義男「薩摩藩の人口」・「薩摩藩と近世琉球国の人口」（『黎明館調査研究報告』11・13）。

※　明治 32 年は『鹿児島県統計表』より

※　昭和 31 年は昭和 35 年「町勢要覧」より町制施行時の人口。（有屋田・岳の 1,593 人を含む）

※　平成 16 年は住民基本台帳より

図３－１　郡山町階層別人口



第二節　集落別人口

ここでは、町内に二〇ある自治公民館を集落の単位として扱う。表３―２では昭和五〇年（一九七五）から平成一六年（二〇〇四）まで五年ごとの集落別の人口増減が表されている。いくつかの目立った変化を挙げてみよう。

約三〇年間で著しく増加する集落は中福良で、約四・一倍となっている。中福良は徒歩圏内に郡山小・中学校や行政・金融機関を置く好条件によって、町営住宅や集合住宅など住宅事情も整い、さらに平成に入って県営団地や民間の宅地が造成され、町内外から居住者を呼ぶことになった。他には柿園、賦合が同じく市街地近隣に位置し、新たな団地や宅地造成が行われた結果、二倍近い人口の増加を生み出した。東秀の約一・八倍は、昭和五五年（一九八〇）の「大英団地」(現在約二七〇戸)の造成が大きいといえる。

また、増加率はさほど大きくないが、目立ったところでは、平成一二年の西俣と川田が挙げられる。西俣では、霧島神社近くに宅地が造成され、川田は平成六年（一九九四）に県営住宅「ガーデンヒルズこいやま」が建設された影響と考えられる。

では、減少した集落の主な共通点を挙げてみると、町の商業圏から遠いうえに、生活の基盤となる産業、特に山間においては農業の経済性が薄れ、働き手が離れていったこと、また、通学圏の小中学校の統廃合が、若年層のいる家族の居住を抑制したことなどであろうか。ちなみに、郡山麓は藩政時代に仮屋が置かれた市街地中心部にある商業・住宅区域だが、平成五年（一九九三）の「八・六水害」

表３－２　郡山町自治公民館別人口の推移

	総計 S50 (1975)	指数	総計 S55 (1980)	S50 指数	総計 S60 (1885)	S50 指数	S55 指数	総計 H2 (1990)	S50 指数	S60 指数	総計 H7 (1995)	S50 指数	H2 指数	総計 H12 (2000)	S50 指数	H7 指数	総計 H16 (2004.9)	S50 指数	H12 指数
本　岳	429	100	407	94.9	386	90.0	94.8	369	86.0	95.6	307	71.6	83.2	275	64.1	89.6	272	63.4	98.9
里　岳	332	100	305	91.9	289	87.0	94.8	262	78.9	90.7	220	66.3	84.0	216	65.1	98.2	204	61.4	94.4
雪　平	246	100	239	97.2	231	93.9	96.7	205	83.3	88.7	176	71.5	85.9	168	68.3	95.5	152	61.8	90.5
八　重	166	100	144	86.7	134	80.7	93.1	133	80.1	99.3	111	66.9	83.5	95	57.2	85.6	86	51.8	90.5
大　浦	347	100	317	91.4	309	89.0	97.5	284	81.8	92.0	253	72.9	89.1	237	68.3	93.7	253	72.9	106.8
常　盤	263	100	259	98.5	279	106.1	107.7	243	92.4	87.1	211	80.2	86.8	208	79.1	98.6	185	70.3	88.9
西　俣	483	100	465	96.3	450	93.2	96.8	424	87.8	94.2	438	90.7	103.3	547	113.3	124.9	539	111.6	98.5
有屋田	294	100	319	108.5	323	109.9	101.3	306	104.1	94.7	265	90.1	86.6	239	81.3	90.2	216	73.5	90.4
甲　突	241	100	234	97.1	249	103.3	106.4	281	116.6	112.9	338	140.2	120.3	338	140.2	100.0	372	154.4	110.1
柿　園	464	100	473	102.0	516	111.2	109.1	591	127.4	114.5	674	145.3	114.0	794	171.1	117.8	901	194.2	113.5
郡山麓	388	100	390	100.5	421	108.5	107.9	450	116.0	106.9	433	111.6	96.2	417	107.4	96.3	344	88.7	82.5
賦　合	365	100	595	163.0	712	195.1	119.7	759	207.9	106.6	722	197.8	95.1	723	198.1	100.1	699	191.5	96.7
油須木	292	100	283	96.9	371	127.1	131.1	386	132.2	104.0	369	126.4	95.6	370	126.7	100.3	368	126.0	99.5
中福良	205	100	319	155.6	382	186.3	119.7	399	194.6	104.5	715	348.8	179.2	756	368.8	105.7	842	410.7	111.4
厚　地	517	100	503	97.3	478	92.5	95.0	446	86.3	93.3	382	73.9	85.7	367	71.0	96.1	353	68.3	96.2
花　尾	586	100	587	100.2	534	91.1	91.0	559	95.4	104.7	495	84.5	88.6	450	76.8	90.9	445	75.9	98.9
大　宮	602	100	612	101.7	612	101.7	100.0	544	90.4	88.9	456	75.7	83.8	405	67.3	88.8	369	61.3	91.1
東　秀	383	100	394	102.9	458	119.6	116.2	589	153.8	128.6	640	167.1	108.7	653	170.5	102.0	678	177.0	103.8
東　俣	622	100	622	100.0	639	102.7	102.7	691	111.1	108.1	684	110.0	99.0	670	107.7	98.0	652	104.8	97.3
川　田	546	100	579	106.0	543	99.5	93.8	453	83.0	83.4	466	85.3	102.9	561	102.7	120.4	615	112.6	109.6
総人口	7,771	100	8,046	103.5	8,316	107.1	103.4	8,374	107.8	100.7	8,355	107.5	99.8	8,489	109.2	101.6	8,545	110.0	100.7

※　各年１月１日現在の数値である。（郡山町役場住民生活課「住民基本台帳」より）

後、営業をやめたり移転したりする店舗が増えたこと、また、都市計画に伴う道路拡張・宅地造成など大がかりな工事が行われているため、現在のところ大幅な居住者増が見込めない状態である。

第四章　集落・自治会

第一節　大字・小字

郡山町は、八つの大字と五八七（町役場税務課資料による）の小字で成り立っている。

郡山の大字は、藩政時代の村が移行したものである。さらにさかのぼれば、中世には満家院という島津荘の寄郡に比志島や小山田とともに組み入れられていたのが大字の前身である。それらは郡山郷の厚地村・東俣村・川田村・郡山村・油須木村・西俣村の六村で、それに伊集院郷の北東にある嶽村・有屋田村が加わり、計八村が大字となって現在に至っている。

明治一五～一七年に編纂された『鹿児島県地誌』には、この村ごとに地勢・産物・名所旧跡・寺社などの記録が残されており、当時は、ひとつの行政的・経済的単位として位置づけられていた。

また、「小字」は明治二二年（一八八九）に大字という呼び名が生まれたのをきっかけにして、それと区別するために作られた名称で、それまでは字の他に、小名・下げ名・一筆書きなどとも呼ばれていた耕地名だったものである（『日本地名大辞典』）。

小字は、ある一定の区域を表すのに一番身近な地名といえるが、現代生活の中ではだんだんと用いられることの少ない地名になってきている。しかし、小字名にはそれぞれの土地にまつわる地勢的・歴史的・宗教的な意味があり、往時を知る際の重要な道標の一つとなるものである。

たとえば、「宮」「神」「諏訪」が付く字（あざ）は、寺社やお堂に関係する土地柄であることが多く、「城」「陣」が付くと、近くに山城や陣跡・古戦場が控えている。「原」「平」「谷」「岡」「迫」などが付く字は文字どおり地形を表すことになる。その他にも擬態語のような字名や由来がしのばれる字名など、いろいろな名付けの理由が込められている。

本項では各大字のおおよその姿を紹介し、各大字内の小字一覧と字名の由来やエピソードなど、また、大字ごとの小字区分図は資料編に掲載する。

厚地（あつち）（小字一三五）

郡山郷の北東部に位置し、北は入来町と蒲生町、東は吉田町に接している。東側に花尾山があり、川田川と宮脇川が中央を南流する辺りに田畑が開け、山間に集落が点在する。花尾小学校・花尾簡易郵便局・花尾保育所がある。北部の宮脇にはかくれ念仏の洞穴が残され、さらに奥には南泉院（なんせんいん）や「花尾瓢箪（ひょうたん）村」がある。

鎌倉時代から見える地名で、中世には東俣名に含まれていたと考えられ（『日本地名大辞典』）、『三国名勝図会』でも花尾神社は東俣村に置かれているなど、東俣との結びつきが強かった。花尾神社が大乗院の支配下に置かれてからは厚地村は大乗院領となった。その

寺社領を明示するため、油須木村と東俣村それぞれの境に境界石が置かれ、現在一一基が確認されている。

茄子田（なすびだ）・脇田・久保山・中原・谷口の地名は一三世紀の古文書に表れ、うち茄子田や久保山は今もなお使われており、八〇〇年近い時を経ている。

東俣（小字八三）

町の南東部にあり、東は三重岳山頂で吉田町と鹿児島市に、北は大字厚地に、南は大字川田に接している。南下する川田川流域に水田が開け、三重岳やその他の山間と川筋に集落が点在している。東俣郵便局・東俣幼稚園・総合運動公園や温泉施設があり、島津氏と縁の深い一之宮神社を白石に置く。児童は川田の南方小学校に通っている。

南北朝時代には見られる地名だが、前述したように、中世の文書類には厚地を含めた地域一帯を「東俣」と称して一組にされていたようである。

川田（小字四九）

町の南東端に位置する丘陵地で、東・南・西は鹿児島市に接し、川田川流域や山間に集落を置く農業地域である。南方小学校の他、温泉保養施設、福祉施設が置かれ、また、川田堂園供養塔群や川田氏累代の墓石塔群など中世の史跡も多数見られる。

鎌倉時代から「河田村」「河田名」などの地名が現れ、比志島氏・川田氏の拠り所として、戦国時代を通じてその名が文書・記録によく登場する。島津義久の軍師として活躍した川田義朗が垂水に転封になるまで居城とした川田城は、平山城として、その遺構から南九州屈指の中世城郭と言って良いものである。

油須木（ゆすき）（小字三二）

町内のほぼ中央部、郡山と東俣、厚地に挟まれた位置にある小盆地。東西の丘陵や山地の間を甲突川の支流油須木川が南流し、その周囲に水田と宅地が続く。国道三二八号が中央部を縦断している。

油須木の地名は鎌倉時代から見える。税所氏から島津氏の支配を経て、近世初頭まで比志島氏が治めていた。文明一七年（一四八五）の川田城の攻防で、島津忠廉が川田城応援の村田経安軍を撃破した上ノ原の古戦場跡（「じょうのやま」と呼ばれる丘）があり、その北側には近都宮（ちかつみや）（「ちかとみや」とも）神社が置かれている。

郡山（小字一六四）

郡山町の中央部を南北に長く繋がり、北は入来町、南は鹿児島市に接し、東は厚地・油須木・東俣、西は岳・西俣に接する。南部の市街地では主要道路が交差し、町役場や郡山小・中学校、商店街に金融機関、住宅地なども集中し、藩政時代には地頭仮屋も置かれるなど、この麓周辺は郡山郷の昔から行政・経済の中枢として機能していた。北部は甲突川の源となる八重山を町境に抱え、中間部では山間と甲突川沿いに水田・畑地が開けている。

地名の由来として、「郡山」の文字どおり日置の郡衙（ぐんが）（律令制下の郡の役所）が関係する地とも言われているが、史料上では、鎌倉時

代から見える地名で、戦国時代まで郡山の支配を巡る攻防が数々と繰り広げられている。麓の背後が郡山城（松尾城）とされ、その周囲には、円照寺、法幢寺跡、諏訪大明神（現潜木神社）、小学校を挟んで中福良には旧郷社の稲荷神社が置かれている。

西俣（小字五三）

郡山の西側を沿うように、神之川の上流から東岸沿いに鹿児島市・伊集院町境まで南北に細長く位置している。県道伊集院・蒲生線が通る西俣中に「西有里研修館」や小団地や工業団地がある。全体的には農業地域、特に果樹園芸が盛んな土地柄である。

鎌倉時代にはその地名が現れ、土地の権利を巡る相論などにしばしば登場する。南北朝期から戦国期は比志島氏の支流西俣氏の所領であったが、一時有屋田に勢力を伸ばした伊集院氏の支配下に置かれた。伊集院氏が島津氏に追われた後は、同氏の直轄地として藩政時代に至った。西俣氏の居城聖城跡が西俣下に、比志島氏の一族辺牟木氏の居城平城跡が西俣上に残されている。

嶽（岳）（小字三六）

町の北西部にあり、北は入来町・樋脇町に接し、西は重平山山頂が東市来町・伊集院町の境界になる。山間に集落が散在し、上宮嶽を源に大字域の東側を南流する神之川に沿って宅地と水田が開ける農業地域である。もとは伊集院郷の一部で、明治二二年（一八八九）から昭和三一年（一九五六）までは下伊集院村の一大字だった。里岳簡易郵便局が西俣・有屋田境界近くにあり、大谷中学校跡地に自然学園が設立されている。嶽の児童生徒が通学していた大谷小・中学校は郡山小・中学校に統合されている。

郵便局前にある旧県社の智賀尾神社は、古代からその叙位記録が残る由緒ある神社として、地域の人々に守られている。また、大谷小跡近くには熊野神社があり、藩政時代の棟札が残されている。なお、藩政時代は嶽村の四割近くを川内平佐の北郷氏が持切在（私領主が一所地以外に年貢収益権を持つ土地。『鹿児島県の地名』）として所有し（「伊集院由緒記」）、残された島津氏の所有する山林「鹿倉」は、伊集院郷の郷士が「行司」として監督に当たっていた。

有屋田（小字三三）

町の西南端に位置し、北は嶽、東は西俣、南と西は伊集院町に接している。神之川と並行して県道蒲生伊集院線が東側を縦断しており、その周囲に宅地と水田が広がる農業地域である。

有屋田名として室町時代から見える。ここを領した有屋田氏は近世初頭に日向国高岡郷へ移された。有屋田上の山城、有屋田城の麓に慶安三年（一六五〇）の庚申供養三重塔があり、その南側に南方（諏訪）神社がある。かつて嶽と同じく伊集院郷・下伊集院村に含まれていた。

なお、本項の油須木から有屋田までは、現在郡山小学校の校区だが、昭和三一年（一九五六）九月まで、有屋田の児童は麦生田（伊集院町）の共進小学校（現伊集院北郵便局付近）に通学していた。

第二節　集落と公民館組織

郡山町の公民館は図4―1のように組織され、表4―1のとおり区分けされている。中央公民館の下に自治公民館二〇、そのうち一三の自治公民館に分館が四二あり、それぞれに班が置かれ、運営されている。平成一六年五月現在、郡山町には、分館を持たない人重・常盤・中福良・郡山麓・賦合・油須木・川田を入れて、四九の「集落」がある。本節では、便宜上この四九を分館数とする。

1　集落（公民館分館）

郡山町では、一般的な「集落」の単位を二〇ある公民館の「分館」としているが、分館の最小世帯数は峠（厚地公民館）の九戸、最大世帯数は柿木平（柿園公民館）の一六八戸と、抱える世帯数にはそれぞれにかなりの開きがある。

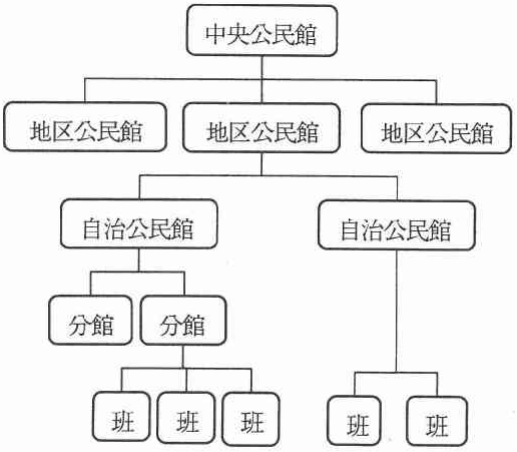


図4―1　郡山町の公民館組織

「公民館分館」の前身は「部落会」で、昭和三二年（一九五七）、郡山町における部落会の第一回会長会議が開催され、その後、「部落公民館」と名称を変えながら、その活動内容が順次形成されていった。その中には、自主的な部落振興活動の他、町と農協・森林組合業務の一部委嘱も含まれていた。この会の数は、発足当時五二となっており、その後、人口減から数ヶ所が合併されたり、大規模な団地造成が行われた東秀の一部分が「大英」として新しく設置されたりと動きがあったものの、現在は四九となっている。昭和四五年（一九七〇）には、住民の過疎化に応じて部落公民館の統合問題が持ち上がり（広報135号）、この動きは後の自治公民館設置に繋がっている。

なお、比較的世帯数が少ない農山村部の分館では、ごく身近な生活圏としての機能を持ち、部落会の発足以前から続く年中行事や講、模合、隠忘（おんぼう）（葬式組）なども、この単位で行われる事がある。

2　自治公民館・地区公民館

四九の集落を地域性や人口の適正規模を考慮して、町内全域で二〇にまとめたのが自治公民館である。昭和四四年（一九六九）一一月に初めて部落公民館統合の説明会を開いた後、四六年度末までに各集落間で統合が進み、一九の自治公民館が誕生した（広報135・142・143号、後に中福良が甲突から独立）。設置のきっかけは、前述のように過疎化や高齢化によって部落公民館運営に黄色信号が点ったことが大きいが、そのような不安要素の少ない部落公民館は、単独で自治公民館へ移行している。また、八重や川田、常盤などは、設置

当時にいくつかあった分館を解体・統一して、今では自治公民館のみとしている。

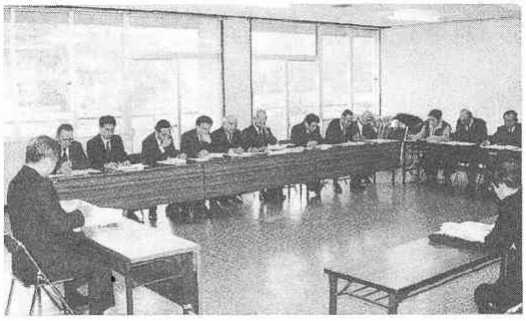
自治公民館は、少ないところでは約四〇戸、多いところでは約二五〇戸数を抱えており、七～二〇戸数を目安に班や下部組織を設けて運営されている。主な活動としては、町の文書の回覧や配布など行政文書の伝達や、子ども会（育成会）・老人会の運営、道路・河川敷の清掃、街頭の緑化・花壇づくりなど、日常生活に根ざした互助的な活動の他、親睦を深める運動会や花見、夏祭りなどを催している。そうした年間計画は運営委員会・理事会などで定め、総会では役員を改選し、組織的かつ計画的に進められている。また、現在では、町の体育祭やバレーボール大会などが、この単位でチーム構成されるようになった。

さらに、この自治公民館の二～八館を一つにまとめたものが地区公民館となる。その区分けは、昭和三一年（一九五六）の町制施行の際、町内にある五つの小学校の通学圏、つまり校区として線引きされたものと同じである。ちなみに現在の校区は、大谷と常盤が郡山に含まれ、花尾と南方の三校区となっている。この地区公民館の発足は、広報の記事から、自治公民館と同時期の昭和四六年（一九七一）頃と思われるが、設立時の記録は見つけられなかった。

地区公民館の単位で進められる活動としては、校区の活性化

表４－１　郡山町公民館一覧（平成16年現在）

分館	自治公	地区公	分館	自治公	地区公	分館	自治公	地区公
仕明	本岳	大谷	西俣上	西俣	郡山	久保山上	花尾	花尾
梨木野			西俣中			久保山下		
大中			西俣下			向江谷		
平			宮下			大平	大宮	
大東			有屋田上	有屋田		宮脇		
里岳上	里岳		有屋田下			大下		
里岳中			清和	甲突		丸山		
里岳下			坪久田			永山	東秀	南方
東雪元	雪平	常盤	中福良	中福良		有島		
西雪元			上園	柿園		大英		
平原			柿木平			湯屋		
八重	八重		郡山麓	郡山麓		宇都		
大浦上	大浦		賦合	賦合		西上	東俣	
大浦中			油須木	油須木		西下		
大浦下			峠	厚地	花尾	白石		
常盤	常盤		茄子田			川田	川田	
			岩戸					



（自治公民館運営委員会）

事業、地域や施設の美化活動、地区内の教育・保健施設での交流促進などがあり、ところによっては、地区住民で構成される消防分団の活動を支援している。

【参考・引用文献】

「鹿児島県地誌」下…『鹿児島県史料集17』、鹿児島県立図書館、昭和五一年
『日本地名大辞典　鹿児島』…角川書店　昭和五八年
『鹿児島県の地名』用語解説…尾口義男・先田光演・山下文武、日本歴史地名大系四七　平凡社　平成一〇年
「伊集院由緒記」…塩満郁夫編、『鹿児島県史料拾遺15』、鹿児島県史料拾遺刊行会、昭和四九年